光の家

LIGHT HOUSE WITH THE BLIND

視覚障害者総合福祉施設
東京光の家会報

— 117号 —

2002年 4 月20日発行

空の鳥を見るがよい。まくことも、刈ることもせず、倉に取りいれることもしない。それだのに、あなたがたの天の父は彼らを養っていて下さる。あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか。あなたがたのうち、だれが思いわずらったからとて、自分の寿命をわずかでも延ばすことができようか。

マタイによる福音書
第六章　二六節～二七節

巻頭言

福祉施設と地域交流

理事長　田中亮治

福祉施設は決して特別な所でもなく、特異な場所でもありません。世間一般と同じように人々の喜びや悲しみ、笑いあり涙ありの人生が展開され、様々な人間模様が織りなす所でもあります。一頃までの所謂"しせつ"といった暗いイメージの実態は全く払拭されていると言っても過言ではない、と私は思っています。だからと言って、今頃の施設は人の努力と創意工夫によって、まるで近代の天国的なものになっているなどと美化するつもりは全くありません。いや、天国どころか、人間の罪ある存在であるごとく、依然として多くの罪が付着していることも認めざるを得ません。残念ながらこれも又、現実の一つです。一般家庭に見られる良い面は、施設にもあります。が、同時に一般家庭にも家族どうしの葛藤があり、確執があるごとく、こんなことも又、施設にも存在しています。

人間生活の中で、人々の懸命な努力と忍耐にもかかわらず噴

桜並木の下、ボランティアと手を取り合って
春の陽光をあびて疾走する東京光の家の人々
（ボランティア　日野市　山田岩雄様　撮影）

出するプラス・マイナスの諸現象が施設生活の中にも存在します。この意味において、冒頭に述べたように福祉施設は特別な場所でもなく、特異な生活空間ではない、と言うことができます。まさに、地域社会を構成する普通の一単位であり、地域福祉の社会的資源の一つであります。だから、福祉施設を必要以上に美化してもいけませんし、又、殊更に「施設なんて」と卑下しても間違いだと思います。

ところで、最近になり施設と地域との交流問題が大きく取り上げられるようになってきました。もしかしたら、この事はこれまでの施設運営の中で最も改革を要する事柄であることを示しているのかも知れません。

そこで当法人は、二年程前に思いきって「地域交流センター」—ボランティアルーム、研修室、音楽室等—を設置し、地域の方々との交流に役立てることにしました。この結果、様々な形で地域住民との交流が活発化してきました。例えば、市内の朗読ボランティアグループの発表会に使われるとか、小中学生たち五〇～六〇名が施設にこられ、園生たちと一緒にミニコンサートを開催するとか、コーラスグループが音楽室を使用するなど、特別な努力することなく、自然のうちに地域との交流ができるようになりました。実は、このような自然の交流が大切だと思います。人工的な何となくおぜん立てされた交流よりも、あまり意識しない自然の交流の方が双方にとって好ましいように思われます。

先般こんな事がありました。近隣のある小学校の児童たちが五〇～六〇名程施設に見え、この施設にあるバンドメンバーたちとミニコンサートをし大変楽しい交流ができました。このことがきっかけになり、児童たちが学校で点字学習をするようになったそうです。やがてそのクラスのみんなが点字を書けるようになったらしく、バンドメンバーたちに点字の手紙を送ってくれました。その手紙の内容は小学生らしく実にかわいらしいもので、一緒にうたったコンサートがとても楽しかったこと、点字の学習が難しかったが、こうやって手紙を書けるようになって嬉しかったこと、又、いつか一緒にコンサートをしたいと思っていること、目の不自由なメンバーに負けないように自分もピアノを練習したいこと等々、素直な思いが綴られていました。

中には笑いを誘うような手紙もありましたが、今後はこれを機に素敵な交流が始まるものと期待されます。施設で生活する障害を持つ者と一般社会との交流が、こんな形で展開され、広まりつつあることを私は心から喜んでいます。こんなのも障害者の社会参加の一つだと思います。

会報五言

一、この国の政界、官界、財界等あらゆる分野で、虚偽を弄する事件相次ぐ。その因いずこにありや。

一、戦後半世紀以上、神を畏敬する教育としつけがこの国から消えてしまったのが最大の要因か。

一、「おのおの自分のことばかりでなく、他人のことも考えよ」（ピリピ書二・4）これが聖書のことば。これ福祉の精神であり、人間関係の基本でもある。

一、社会的地位、財力、各能力を何に用いるか。これ人生の大問題。真理の為、善事の為、他者の為に用いてこれらは真に生きる。

一、他者、特にいと小さき者の為に尽くすこと程尊きことなし。これ神の最も嘉し給うことなりと信じる。

光の家の活動には可能な限りの支援を

日野市議会議員　沢田　研二

私が東京光の家を、より強く意識する様になったきっかけは何と言っても「正秋バンド」の日野市民会館でのコンサートを聴いてからでした。まだグループ結成からそれ程時間が経過していなかった時期だと記憶しています。公演が始まる前に映像によって、グループメンバーの光の家での日常生活振りや、練習の様子、さらにメンバーそれぞれの障害の状況等々が紹介されたと記憶しています。

視覚障害だけでも、ピアノやドラム・シンセサイザーなどの演奏をすることが大変と思われますが、他にも自閉症等々の重複障害があるという事でした。この事は、練習の時もさることながら公演本番中の気持ちのコントロールを、どうやって保っていくのか等々考えると、バンドメンバーの皆さんの大変さはもとより、それをアシストする光の家の職員の皆さんの大変さは並大抵の事ではない、と思いながら「正秋バンド紹介映画」を拝見しました。

さていよいよ演奏が始まりました。一曲二曲三曲と聴くうちに先程見た映画の内容が思い起こされ「よくぞ頑張ってこれまで演奏できる様になったものだ」と感激し、暫くの間、涙が止まりませんでした。そしてまた、正秋バンドの皆さんは「重複障害のハンデにも負けず頑張っているのに、健常者の自分の努力不足はなんだ」等々、何か忘れていた大切なものを思い起こし感動感動のコンサートでした。

その後、東京光の家と私の勤務する東芝とは、目と鼻の先、歩いても数分の距離という事もあり、何かボランティアでお手伝いできる事があるなら、と思っていたとき、ちょうど「光の家愛のサウンド後援会」が発足し、その理事にとの誘いがあり以降一〇年以上の係わりが今日まで続いてきています。

この間「愛のサウンド後援会」理事という事だけでなく、元々近隣同士という事もあって、東芝夏まつりへのご招待などを東京光の家の皆さんに行い、さらに、地域の皆さんには休日等、体育館やグランド等の貸出しも一部行っています。これは「東芝グループ経営理念」の中の一つに、地域社会への発展に貢献する、という方針に沿っての事ですが、東京光の家には、福祉施設へのさらなる支援と協力という事から、特別対応の形で平日の日中に行われる新生園運動会や、東京都障害者スポーツ大会の練習にグランドや体育館の開放もしています。また地域にもすっかり定着している秋のチャリティーバザーでは、駐車場の開放。そして今年で一五回目の開催となった「旭が丘ふれあいマラソン大会」も、より安全な運営という事で東芝の構内道路の一部を使って行われました。多くのボランティアのご協力もあって、無事に盛大に終了しました。

これからも東芝と地域とのパイプ役として、とりわけ身近な地域の仲間でもある東京光の家の活動には可能な限り支援していきたいと思っています。

重度身障更生援護施設　光の家新生園

新生園の合言葉 "やさしさ、明るさ、思いやり"

今年はすっかり桜が散ってしまった四月八日、入所式及び訓練開始式が行われました。三月には、訓練を修了した三名の園生を送り出し、別れを惜しんだのも束の間、新しい仲間を迎えることとなりました。

入所に際しては開設以来、必ず「体験入所」という日を設け実際に作業や運動等の訓練を受けてもらいます。やはり自己決定を尊重していく上には、実際に各訓練、生活を体験する必要があると思います。そして、本人の意思により新生園の一員となるのです。

新生園では、様々な障害を併せ持った園生に対し、どんな訓練の提供が出来るか模索し実践を重ねてきました。それは、各々の希望を取り入れ必要な内容を細かく検討していきます。そして、小さな可能性でも探していくことを目的に働きかけ、自立援助を展開してきました。

このように一人として同じ日課の方はおらず、千差万別な訓練メニューが組まれていくのです。こうして巣立っていった園生は、延べ一二〇名を超えることとなりました。

不安と期待で一杯な五名の新入園生。一堂に集まった先輩園生と職員、保護者等に見守られ緊張した中、新しい一歩を踏み出しました。

「やさしさ、明るさ、思いやり」これは、新生園の園生達が運営する自治会（若草会）のキャッチフレーズです。この園生代表として会長の井沢君が歓迎の言葉を、そして去年入所し新しく先輩となった金田君が聖書朗読を、又、景気良く歓迎演奏を正秋バンド有志が行い、五名の顔も少しほころんでいるようでした。ここでの笑顔と笑い声が絶えない生活に早く慣れ、力が発揮出来るよう応援していければと思います。

男性三名と女性二名の初々しい新入園生を迎え、後輩に負けない意気揚々とした先輩園生と共に、心新たにする幕開けの日となりました。

（新生園作業訓練係　新藤泰恵）

重度身障授産施設　光の家栄光園

オイルショックの時に開設され三〇年 生活しやすい部屋に変わった栄光園

平成一三年度を締めくくるにあたり、栄光園では大きな工事を二つ控えていました。一つは食堂の拡張工事です。月曜～金曜、昼の食事は入所園生六〇名と通所園生一八名、合わせて七八名と大勢の食事で賑わいます。しかしその通所園生のテーブルスペースには、すぐ後ろにベランダが迫っており出入りするにもお互いゆずり合ってのものでした。更に一四年度には新しい仲間が加わります。そこでベランダの部分まで食堂を張り出してはどうかということになり、工事が始まりました。出来上がりまで約一週間、仮構いが取れると天井の高さまである大きな窓のおかげで、明るく広く感じられます。さっそく園生か

らは「わあー明るい」と感想が聞かれ、「広いね」と喜びの声があがりました。又、サッシ部分からの出入りも可能となり、非常口として安全性も確保されました。ゆったりと食事のできる空間に変わり、園生職員共々喜んだ次第です。そしてもう一つの工事が押入れの工事です。栄光園開設以来、二七年間使い続けてきた押入れは老朽化が進み、又、間仕切りのない押入れは、園生にとって把握しにくく、使いづらいものでした。そこで園生自身が自分一人でも整理整頓のできる自立につながる設計と、収納力アップを課題に考えました。布団の出し入れに便利な高さ、引き出しには仕切りをつけて種類別に衣類が入るようにしました。本やカセットテープ類の専用の棚も設けました。

そしてそれまでの雑然としたスペースであった押入れに替わって、自分のスペースとして楽しめる押入れが完成したのです。工事期間中は、二泊から三泊、別の部屋での生活が必要でしたが、園生全員が新しい押入れを待ち望んでいた為、多少の生活のしにくさも「合宿みたい」と、明るく乗り切りました。出来上がった新しい押入れに、その手で実感すると「いいねぇ」「使いやすいね」と喜びの声があがりました。資金面はもちろん、設計から実際の引っ越しと、様々な困難はありましたが、全員が、実現できて本当によかったと喜んだ春の大工事二つでした。

（栄光園生活指導係　高橋郁子）

救護施設　光の家神愛園
「ハンドエクササイザーくしゃもみ」を"光寿会"で取り入れて

日本の国はあっという間に高齢化が進み、光の家神愛園でも平均年齢は六二歳となりました。在籍七九名中三三名が六五歳以上で最高齢者は九一歳です。失明という障害があっても皆さん若くて元気です。その理由は高齢者のみの集団ではなく、三〇代から九〇代までが共に生活し、六時半の起床から日課をこなし、楽しんで作業を行い、サークル活動も一生懸命という規則正しい生活があるからです。その中で高齢の方々が大切にしている"光寿会"では月一回、お互いの健康を確認しあい、楽しく集います。

田中理事長の挨拶から始まり、全員が理事長と握手を交わした後、機能低下防止の運動を取り入れました。特に握力の衰えが目立つ為、手指運動にはお手玉と「ハンドエクササイザーくしゃもみ」を使います。お手玉の中の小豆、数珠玉等を当てたり、形を確かめ俵型や六角形を指先で見つけます。それからはおもむろに、幼い頃の思い出話が戦争体験と共に語られます。さて、色とりどりのお手玉とは一味違う「ハンドエクササイザーくしゃもみ」は特殊ポリウレタンで出来た直径五cm、重

さ五〇gのボールです。握り締めると変形するのが面白く、アメリカの作業療法士が開発した指や掌の為のストレッチ用品です。しかも握力の強化やストレス解消が出来、指や掌のトレーニングになります。掌に心地よい柔らかさが赤ちゃんの肌に似て、握った園生の顔に笑みが溢れます。この運動後、やっぱり最後は大きな声で得意な歌を合唱し、締めくくります。又、みんな美味しいお茶と饅頭で満足し、次回への楽しみに繋げます。

このように高齢の園生は、何をしても一日一日生きている喜びを噛みしめています。そして、この光寿会の仲間は何十年という長い年月、失明という重い障害をつぶやかず、不平も言わず負い続けてきました。「良く頑張ったね」と神様からお褒めの言葉を頂く日迄、望みを託し明るく元気に助け合って仲良く生活しています。

（神愛園指導課長　岡本一美）

盲人ホーム　光の家鍼灸マッサージホーム

私と鍼（はり）

私が鍼治療を始めてから、もう四〇年以上になります。

生来、虚弱体質であった私にはマッサージで身を立てるという事は到底無理な事でした。しかし図らずも、当時は「鍼の大御所」とも言われた平方龍男先生の御指導を受けるという光栄に浴し、そこで二九年という永きに渡って養い育てられました。又、これも全く予期しなかった事ですが、「光の家鍼灸マッサージホーム」に入所する事が許され今日まで充実した毎日を過ごしています。日々の中には様々な事がありますけれども思い返せば全て神様の導きであったと確信し、感謝しております。

私は治療するにあたっていつも心しなければならないと思っている事があります。それは治療の結果もさることながらその場に臨む自分自身の姿勢です。平方先生はよく、「私が初めて患者さんから料金を受け取る時『私はこれだけの料金を受け取るだけの事をしただろうか』と手が震えた」と言って私達の姿勢のあり方をたしなめられたものでした。しばしば、この言葉を思い出し、新たな心にさせられて、今日もわざわざ私のような者をも信頼して訪れて下さる方々に、感謝の思いを持って精一杯努力をさせて頂こうと願っています。（鍼灸師　山内龍子）

マラソン大会

手と手をつなぎ　心を通わせて

去る三月二一日（春分の日）に第一五回旭が丘ふれあいマラソン大会が、桜が満開の東芝日野工場グランドにおいて、園生、ボランティア、保護者、職員総勢二四〇名の参加のもと、盛大に行われました。今大会に向けて園生達は一月から一生懸命に練習に取り組み、ボランティアの方は二月、三月にボランティア教室が行われ、ガイドヘルパー講習を受けて頂いたり、実際に園生と試走したりと本番に備えてきました。

当日は天候も良く（少し？風が強かったですが）六七組の選

手達が、それぞれの目標に向け自分の力を出しきって走る姿が多く見られ、三キロ、五キロコースともに全員完走することができました。一人では走れないけれど、ボランティアの方と手と手をつなぎ、心を通わせて走り終えた園生達の笑顔、笑顔。この大会開催にご協力頂いた全ての方々に感謝申し上げます。

一位は22分12秒　浅石薫君(25歳)

最後にボランティアの方々の感想文の一部をご紹介させて頂きます。

「今回初めて参加しましたが、話に聞いていた以上に素晴らしいふれあいの場であったことに感動。視覚障害者がこんなにも明るく、生き生きと過ごしていることに感銘しました。」

「光の家の園生の顔は何か元気に溢れていることを感じました。お互い声をかけ合って一歩一歩前進する姿に、目の見える私は園生の人達に教えられる思いがしました。」

「今回、初めて伴走という経験をさせて頂きました。不安もありましたが、しっかり握り返してくれる手はとても温かく、心が落ち着くものでした。皆さん、とても純粋で、仲が良くて、短い時間でしたが、毎日を一生懸命に生きてゆこうと感じました。今回のマラソン大会を通して、人と触れ合うことの楽しさ嬉しさ、心を開いてもらえることの、言葉にできない喜びを今実感しています。この様な催し物に参加できて、とても嬉しく思います。」「手をつなぎ声かけ合って走りたり、桜の咲きしマラソンコースを」

(新生園訓練課主任　小倉実知彰)

保護者の声

うれしい娘の思いやり

栄光園保護者　荒　百合子

「元気かと思ってさ…。」と、週に二度程電話がかかるようになったのは、私が病気をしてからです。娘なりに、具合の良くない母の体を心配しているのでしょう。「私のことは心配しないで、早く元気になってね。」という優しい言葉に胸があつくなります。休みには、必ずボーナスを使わずに持ち帰り、「後でお母さんの好きな物を買ってね。」と言いながら、仏壇へ供えます。

園長をはじめ職員の方々にご指導いただき、沢山の事が身についた様で、娘自身もやりがいがあるのでしょう。「仕事が待ってるから。」と、帰省を終えて意気揚々と帰ります。その様子をいつも見ている妹は、「お姉ちゃん、キラキラしているね。」と言っています。

新生園から栄光園に移り早四年、娘は心身共に成長しているようで、うれしく思います。娘自身も栄光園にいられて幸せだと言っております。

光の家にお世話になれて、心から感謝しております。

地域の小中学生達との交流

「総合学習」という言葉を最近よく耳にするようになりました。小学校、中学校のカリキュラムの中に『国語』『数学』といった教科以外に設けられた時間だそうです。その授業の中の一つとして、福祉のことを学び、高齢の方、障害を持っている方と触れ合いながら学ぶことを目的としています。光の家にも毎年たくさんの小中学生の子供達が訪れるようになりました。

今年に入ってからは、一月には八王子市立高倉小学校四年生、二月には日野市立第六小学校三年生の皆さんが「正秋バンド」との交流を行いました。以前は正秋バンドの演奏を聴くのも小学校の体育館で行うしかなく、それぞれで準備が大変でしたが、当施設の地域交流センターに音楽室が出来た事により、気軽に交流が出来るようになりました。また、舞台がないため同じフロアでの演奏なので親近感も出て、今まで以上の触れ合いが出来るようになりました。

今回二回とも同じプログラムで行いましたが、中でも「皆と歌おう」では『サザエさん』『さんぽ』『手のひらを太陽に』そして『明日があるさ』をバンドのメンバーと子供達が一緒に元気良く歌い、今までにない光景を見る事が出来ました。演奏を聞いた後の交流では「目が見えなくて困った事は？」「どうやって歩くの？」等たくさん質問が出て、メンバーも自分たちのことをよく知ってもらうため一生懸命応答し、素晴らしい交流が出来ました。

今後もこういった機会が増え、地域との触れ合いが広がっていくと良いと思っています。

その後、子供達からお礼の手紙（点字で書いてきた所もありました）が送られてきましたので紹介したいと思います。

日野市立第六小学校 三年生より

有田　朋央

「正秋バンドの皆さんへ。ぼくは目が不自由な方は、がっきやスポーツができるなんて思ってもいませんでした。僕は『明日があるさ』の曲が楽しかったです。あと、オリジナル曲の『今を生きて』という曲が一番すてきでした。あと、正秋さんは目が不自由な方なのにピアノが上手なのでびっくりしました。」

清水　裕斗

「光の家の正秋バンドのみなさんへ。すてきな曲を聞かせてくれてうれしかったです。またすてきな曲をききたいです。一人ずつすてきながっきをみせてくれてうれしかったです。」

松沢　唯

「『今を生きて』の曲を聴いて、とても目の不自由な方がひいているとは思えませんでした。そのお返しに、わたしは、ある歌をちょっとかえてみました

♪ありがとう、さようなら
まーさあきばんどがたのしい
えがおわーすれない　一人一人のえみ　一人一人のバンド
みんなたのしく聞いていたよ　ほんとにありがとー　さよなら♪

ほんとにありがとうございました。」

※これは声のテープの中で歌ってくれていました。

（新生園訓練課係長　小坂　鑑）

九月二八日午後三時～
愛のサウンドフェスティバル
正秋バンドコンサート

（会場）アミューたちかわ大ホール（立川市民会館）
（福祉協力券）二、〇〇〇円
売出し七月一日、希望者は電話でお申し込み下さい。

地域交流センターで
朗読発表会

朗読サークル「ひの」代表　中島　紀宮子

朗読サークル「ひの」は発足して一五年、現在三五名で月二回の学習をしながら種々のボランティア活動をしています。活動がスムーズに行えるよう四つのグループに分かれ、全員が時間と労力を惜しみません。発表会は一年間の集大成として、各々が力を発揮する機会です。活動の合間を縫って秋頃から下準備を始めます。各々のグループが他とかち合わないよう、粛々と内密に…。当日まで役員以外は他グループの詳細を知りません。これも楽しみの一つなのです。二年続けて、会場をお借りした発表会。他を聞く楽しみと園生さんに聞いて戴く楽しみが重なりました。トップの「にほんご」で、園生さんが期せずして七人で唱和する部分を、全員で唱和されたのです。その迫力に皆感動し、力を与えられました。長い時間を皆さんよく聞いてくださいました。はたして私達の発表はいかがだったでしょうか。「朗読はただ読めばいいのではない、心を伝える仕事」という先輩の言葉を大切に、今後も活動してゆきたいと切に願っております。

秋元梅吉聖書講話集録音テープ第三巻が完成！

去る二月八日、東京光の家講堂に於て園生、職員が一堂に会し、「創立者秋元梅吉二七周年記念追悼集会」が行われました。田中理事長による「信仰の継承がなぜ大切なのか」と言うタイトルで講演があり、二七周年を記念し秋元梅吉講話集テープ第三巻も（朗読サークルひの）の林由美子さんの朗読奉仕によって製作する事ができました。テープの内容は秋元先生の講話を始め先生の肉声や光の家新生園特別ユニット聖歌隊の皆さんによる讃美歌五〇〇番のコーラスが収録されています。ご希望の方はご一報ください。

（表紙写真は昭和三六年頃の昔なつかしい写真です）

ボランティア交流会 ～多くの力に支えられて～

去る二月一四日、東京光の家地域交流センター音楽室において、第六回ボランティア交流会が開催されました。光の家では、作業補助や行事のヘルパー、宛名書き等、直接園生と関わる内容だけでなく様々な場面でボランティアの力に支えられており、年間で延べ三〇〇人以上の方が活動をしてくださっています。今回の交流会には、二〇名ものボランティアに参加していただき、出席者の自己紹介の後には、日頃の感謝の意を込めて園生の聖歌隊による歌が披露され、和やかな雰囲気となりました。約一時間半をかけて行われた懇談では、大変活発な意見交換がなされ、ボランティアの方々の生の声を聞く良い機会となりました。最も多い意見としてはボランティア募集のPRの強化やボランティア同士の横のつながりを求める声が多く聞かれました。交流会を通して、ボランティアの皆様の熱心な気持ち、温かい心に触れ、「支えられている」ことを実感し、今後、ボランティアの方々や地域社会に対して何ができるのか、何をすべきかという目標を見つけることのできた会となりました。ありがとうございました。

（ボランティア活動委員　室屋安希）

熱心に語られるボランティアの方々

耳の健診より「この音聞こえますか」

施設では、年間を通して様々な健診があり、数年前より耳の健診を実施する事になりました。視覚障害のある人は、視力を補うために、聴力には特に大きな働きが要求されます。日常生活では、様々な音を聞き分けなければならず、外出の際には、車の音や信号機の音を正しく聞き取り、安全に行動しなければなりません。近年利用者の状況にも変化が見られるようになりました。音楽の好きな人も多く、集団生活ではヘッドホンを使い、長時間耳元で大きな音を聞くために起こる難聴や、施設でも高齢化が進み、老人性難聴の人も増えてきました。生活面では細心の配慮が求められてきました。聞こえの悪い事から、人とのコミュニケーションが取れなくなり、孤立化する心配もあります。聴力低下にも気付かずに、生活している場合もあります。

健診では、医師の診察の他にオージオメーターでの感音検査も取り入れました。障害のある人には生活面での注意や、補聴器の検討もされます。視力障害の人は聴力は特に敏感で大事な所であり、安全で快適な生活が送れるように頑張ります。

（医務課主任　古川あや子）

平成一四年度 新任職員の紹介

四月を迎え、初々しく、そして若さ溢れる三名が光の家の職員に加わりました。就職に先立ち、三月一八日から三日間行われた新任職員研修は真剣そのもの。職員としての心構えから、光の家の歴史、医学知識・救急法、盲重複障害等について学んだ三名は心も新たにそれぞれの部署で仕事に励んでいます。

○**利根川　正**（新生園）

大学では経営学を専攻、在学中に老人ホームの宿直アルバイトをし、卒業後は国立リハビリテーション学院視覚障害科で学びました。バスケットで培った努力と根性、そして若さで、皆さんから信頼を得られる職員になれるよう頑張ります。

○**佐藤　和**（栄光園）

大学では国文学を学びましたが福祉に興味があり、卒業後は国立リハビリテーション学院に入学しました。体は小さいですが空手をやっており、力仕事も得意です。今はまだ不慣れですが、園生のことを第一に考えられる職員になりたいと考えています。

理事長を囲んで三人の新人職員

○**朝尾　公美子**（神愛園）

栃木の国際医療福祉大学で学び、卒業と同時に社会福祉士と精神保健福祉士の資格を取得しました。人から穏やかと言われる雰囲気を活かしつつ、機敏さを意識して仕事に励み、園生の言葉の奥にあるものにも気が付ける職員になりたいと思います。

寄付者名簿

平成一三年一二月二六日～平成一四年四月一五日

国庫補助　業務省力化設備補助
パソコン機器等一式　三七八万五千円
日本財団様　点字テキスト助成金　八〇万円
岩島菊乃様　三〇万円
三澤榮二様　二万円
テーラーサトー　佐藤末男様
高橋正秋ステージ衣装　一着
渡辺道代様
高橋正秋長襦ステージ衣装（着物）　一着
源内良樹様
チョコレート詰め合せ　一箱
島本みゆき様　長葱　二二kg
横澤大行様　リンゴ　三六個
内藤奈津子様　パウンドケーキ　一〇個
平林康子様　干柿　五二個
㈱ハウジング恒産様
常備薬セット他　二セット
仲門芳江様　CDラジカセ　二台
林アツ子様　ラスク　二ケース
貫井佐一様　醤油六本、里芋　一五kg
㈱グリーンハウス様
おせち料理　八セット
柏田功様　みかん二〇kg、セロリ一〇kg
桐生三郎様　トマト　九kg
広瀬進様　リンゴ　三二個
㈱ジャパンエナジー総務部様
童話集　一〇〇冊
東毅協会様　小倉餡　六〇kg
小倉知香子様　はんぺん　五〇袋
浅石常勝様　伊予柑　二二八個
大野かよ子様
ドライバーセット　二二セット
東京電力㈱八王子営業所様
点字図書・テープ図書　一五巻
井上勝子様　羽織　八枚
桐生修行様　トマト　六kg
佐々木信也様　文旦　二〇〇個
横山秋男様　伊予柑一箱、りんご二箱
熊谷幸夫様　わかめ　二〇kg
小倉きん様　落花生　一・五kg
向井英行様　テント横幕　一〇枚

訃　報

昭和三九年四月から、平成九年一一月まで、計四一三回、東京光の家の日曜聖書集会で講話をして下さった、岩島公先生が、去る一月二九日、九五歳で天に召されました。一月三一日に前夜式、翌二月一日には告別式が、岩島先生の生前からのご希望により東京光の家講堂で取り行われました。

ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

ご挨拶をなさるご子息の清さま

三施設 締めくくりの会

東京光の家では、毎年三月に年度末のしめくくりの会が盛大に行われている。今年のトップは三月二五日神愛園（救護施設）の感謝会。ステージ一杯に飾られた紙で作った美しい木々の下で、三〇代の若者から九〇代の高齢者まで舞台せましと楽しい余興が行われた。二六日には栄光園（授産施設）の「みのりの会」。二〇年及び一〇年勤続者四名が表彰され、すばらしい記念品も贈られた。最後は二七日に新生園（重度更生援護施設）は「納め会」と称し、訓練修了式で一年間を振り返りながら、演劇クラブの創作劇「夢に向かって」を熱演した。これらの会には保護者、ボランティア等の日頃お世話になっている方々をお招きし豪華な食事を楽しみながら行われた。各施設共、一部は讃美歌を讃美し、聖書朗読、式辞等厳粛な雰囲気で始められた。最後に退職職員の送別会等があり、一年間の総決算の行事がにぎにぎしく行われ、一三年度も無事に守られた事を皆で感謝することができた。次に、各施設の様子を写真で紹介する。

新生園納め会　演劇クラブの創作劇「夢に向かって」

栄光園みのりの会　参加者全員で会食

神愛園感謝会　表彰される今村寛二さん、山崎幸子さん

※行事コーナー※

二月一四日

藤本夕照会 おさらい会

日野市民会館にて 石投甚句をうたう

中央　高橋正秋さん（着物）
その左から　山畑徹さん、松坂寿助さん

あとがき

二月は逃げる、三月は去る、という言葉がありますが、あっという間に平成一四年度を迎えました。今年は桜の開花も早く四月に入る前に満開になり、何となく生活のリズムが狂ってしまいました。

平成一五年度から身体障害者・知的障害者施設は支援費制度が導入されます。従って、この一四年度を最後に、我が国の福祉制度は大きく変わることになります。

東京光の家では全施設が「安心と安全と希望～生活には喜びを～」というスローガンをかかげ、間もなく訪れる制度改革に備えることにしました。

会報一一七号をお届けいたします。ご高覧の上、ご感想等をお寄せ下されば幸いです。

平成一四年度　広報活動委員会
（委員長）田中のぞみ（委員）平野吾一、古川あや子、小倉実知彰、村上英明、岩崎幸一

発　行　〒一九一―〇〇六五
東京都日野市旭が丘一―一七―一七
社会福祉法人　東京光の家
電　話　〇四二（五八一）二三四〇
FAX　〇四二（五八一）九五六八